

火鉢の類に至るまで、質屋の蔵へ運ぶことができるからである。私どもも、そうした氣候の恩恵に浴して、あすはどうなることか、月末の間代の支払いはどこから捻出するか、というような先の心配をのぞいては、先ずちよつと息をついたのである。そして、しばらくは遠慮しておいた銭湯へも行けば、床屋へも行く、飯屋ではいつもの味噌汁と香の物の代りに、さしみで一合かなんかを奮発するといったあんばいであった。

ある日のこと、いい心持になって、銭湯から帰ってきた私が、傷だらけの毀れかかった一閑張りの机の前に、ドツカと坐ったときに、一人残っていた松村武が、妙な、一種の興奮したような顔つきをもって、私にこんなことを聞いたのである。

「君、この、僕の机の上に二銭銅貨をのせておいたのは君だろう。あれは、どこから持ってきたのだ」

「ああ、おれだよ。さつき煙草を買ったおつりさ」

「どこの煙草屋だ」

「飯屋の隣の、あの婆さんのいる不景氣なうちさ」

「フーム、そうか」

と、どういうわけか、松村はひどく考えこんだのである。そして、なおも執拗にその二銭銅貨について訊ねるのであった。

「君、そのとき、君が煙草を買ったときだ、誰かほかにお客はいなかったかい」

「確か、いなかったようだ。そうだ。いるはずがない、そのときあの婆さんは居眠りをして

いたんだ」

この答えを聞いて、松村はなにか安心した様子であった。

「だが、あの煙草屋には、あの婆さんのほかに、どんな連中がいるんだろう。君は知らないかい」

「おれは、あの婆さんとは仲よしなんだ。あの不景氣な仏頂面が、妙に気に入っているからね。だから、おれは相当あの煙草屋については詳しいんだ。あそこには婆さんのほかに、婆さんよりはもつと不景氣な爺さんがいるきりだ。しかし、君はそんなことを聞いてどうしようというのだ」

「まあいい。ちよつとわけがあるんだ。ところで君が詳しいというのなら、もう少しあの煙草屋のことを話さないか」

「ウン、話してもいい。爺さんと婆さんとのあいだに一人の娘がある。おれは一度か二度その娘を見かけたが、そう悪くないきりようだぜ。それがなんでも、監獄の差入屋とかへ嫁入っているという話だ。その差入屋が相当に暮らしているの、その仕送りで、あの不景氣な煙草屋も、つぶれないで、どうかこうかやっているのだと、いつか婆さんが話していたつけ……」

二 銭 銅 貨

私が煙草屋に関する知識について話しはじめたときには、驚いたことには、それを話してくれと頼んでおきながら、もう聞きたくないといわぬばかりに、松村武が立ち上がったのである。そして、広くもない座敷を、隅から隅へ、ちやうど動物園の熊のように、ノソリノソリ